に類例がみられる。このうち「笠形木製品」と称される石見遺跡例はやや形態を異にするが、他は非常によく似ている。その用途は不明であるが、石見遺跡では枘を有する鳥形木製品が共伴しているのが注目される。いずれにしろ安定した形状や、中央部に枘孔を有する点等からみて、何かの台座として使われたものであろう。

磁器　いずれも染付碗で近世のものと思われる（第32図27～29）。27は灰緑色の、28は藍色の簡単な染付が施されている。Ⅳ層出土の28の他はⅤ層より出土。この他細片のため図示できないが、Ⅳ層からは染付原料に鮮かなコバルトブルーを用いた近代以後のものが出土している。

瓦器（第32図30）　擂鉢体部の小片である。Ⅴ層より出土。

土師器（第32図31・32）　31は手捏ねの小皿で、口径一〇・六センチ。32は土堝の口縁部で外面には煤が付着している。ともにⅣ層から出土。

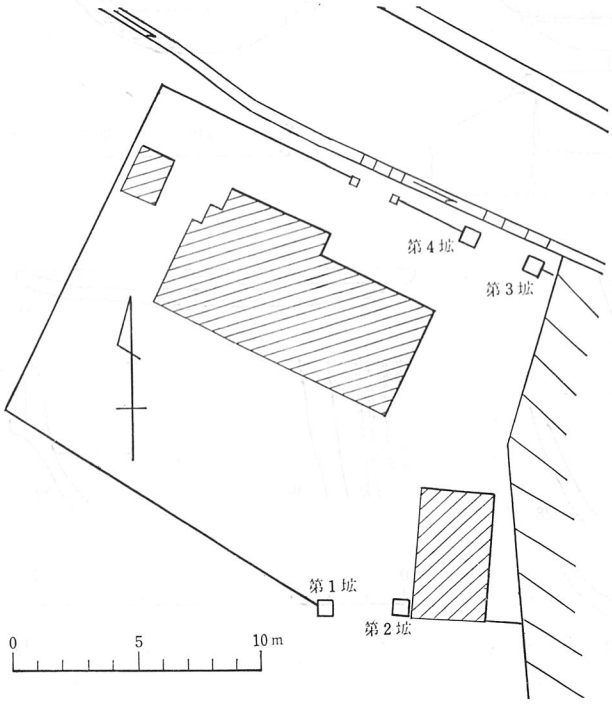
註

1　河上邦彦「新庄町飯豊陵外庭の調査」（『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』昭53、所収。）

（土生田純之）

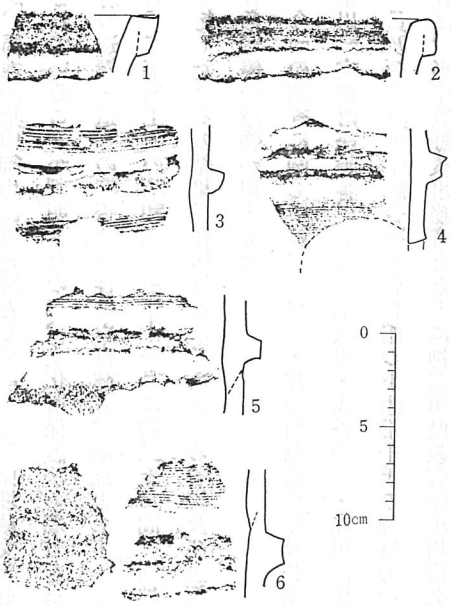
応神天皇陵外構柵改修区域の調査

応神天皇陵陪冢丸山の東側墳丘裾部に外構柵扉柱を設置するため、昭和五十四年三月三日に調査を実施した。調査は、柱埋設壙（〇・五メー



第34図　応神天皇陵域内丸山外構柵扉柱設置箇所図（1/300）

第33図　応神天皇陵域内丸山周辺地形図（1/200）



1, 第1墳　2, 4〜6, 第3墳　3, 第2墳出土

第35図　応神天皇陵域内丸山出土遺物実測図

(1/4)

トル四方、深一メートル）四箇所の掘削に立会って行った（第34図）。土相の状況は基本的に同一で、上部約〇・六メートルは埴輪片を包含した黄褐色小石混り土層で直接地山の灰褐色粘土層に接している。この包含層は有機質土をまばらに含み、丸山の墳丘が削られてできた盛土、または二次堆積であろう。このように工事に支障ある状況は認められなかったので、予定通り扉柱を埋設した。

出土遺物は埴輪の円筒部片ばかりで四十四箇あるが、いずれも小片で全形を窺うことはできない。第1墳、第2墳及び第3墳より出土した。

口縁部　採集したものはいずれも特徴ある折り返し口縁であるが、断面が角ばったもの（第35図1）と、丸みをもつもの（2）とがある。

胴部　凸帯はいずれも断面が台形を呈する。外面の調整は、横のはけ目によるが、横のはけ目調整前の、縦のはけ目が一部残っているもの（3）もある。内面は、横なでを基調とする他、一部、横のはけ目を施したものもある。ただし、横のはけ目については細片のため図示できなかった。

（土生田純之）